

仮定法と As if 構文を日本人高校生にどう教えるか

Teaching the Subjunctive Mood and the As-if Clause to Japanese High School Students

伊原 巧

長野保健医療大学

奥村信彦

長野工業高等専門学校

キーワード：英語教育、英文法教育、仮定法

English Language Education, English Grammar Teaching,
Subjunctive Mood

要旨:EFL環境にある日本の英語教育において、日本人学習者が英語を理解し運用する上で、困難である又は誤りやすい文法項目がいくつかある。基本的には、英語にある文法・語彙範疇や発想が日本語にはない、あるいは1対1の完全対応をしない場合である。その中でも日本人学習者が特に苦しめられてきたのは「仮定法」である。

その理由はいくつか考えられるが、「仮定法」が日本語に完全対応する文法範疇でないという理由以外には、「仮定法」の英語史上の複雑な変化が文法学者に多様な記述的立場を生み出したためだと考えられる。そのため、複雑な変化を背負う現代英語の「仮定法」の記述が、言語形式、意味、時制の点で複雑となり、学習者の理解を妨げてきた。

そこで本稿ではまず、日本人学習者の中でも特に、「仮定法」を初めて学習する高校生の理解を促進するために、「仮定法」の内容を学校文法の立場から整理し、その指導のポイントを考察する。次に、「仮定法」を用いる数多くの項目の中でも、日本人学習者が特に理解しにくいと思われる as if 構文を取り上げ、その指導のポイントを考察する。

Abstract: This paper discusses how the subjunctive mood and the as-if subjunctive clause should be taught to senior high school English students in the Japanese context. Because the subjunctive mood has no counterpart in Japanese, it and one of its usages, the as-if subjunctive clause, are among the most difficult grammatical items for Japanese learners of English, especially high school students learning them for the first time.

Accordingly, we arrange some target usages of the subjunctive mood and the as-if subjunctive clause progressively so that they can be as easily understood as possible. Then, we grammatically analyze each of those usages, discussing how to teach each and, indeed, whether it should be taught at all.

1. はじめに

日本のように日常生活で英語を使用する必要もなく、英語のシャワーも確保できないEFL環境(外国語としての英語環境)で生徒に英語を理解させ、英語を運用できるようにするにはどうすればよいのだろうか。この課題に挑戦するために、古くは明治時代の英文解釈法や受験英語から各種教授法、さらにはThinking in Englishや、最近では文科省の「訳読によらず、概要や要点をとらえるような言語活動を多く取り入れていくことが重要である」⁽¹⁾、といった百家争鳴の主張や提案が時代と共になされてきた。いずれも一理ある理論・提案であり、それらに基づいた貴重な教育実践も数多くなされてきた。

これらの中に、構造言語学や変形文法などのいわゆる新言語学が出現する以前から、伝統文法や科学文法の名前で呼ばれる文法理論に依拠しながら、それを英語教育に利用・応用する試みが数多くなされてきた。いわゆる「文法・訳読式教授法」である。さらに、この教授法に、日英語の比較など独創的な工夫を取り入れ、日本人学習者に英語をいかにわかりやすく効率的に学習させることができるのかを追求し体系化してきた学習法があった。これは世界でも例のないほど学習者本位の、日本の「学校文法」であり、「英文解釈法」、「和文英訳法」、「学習辞典」などであった。これらは明治以降、英語の教科書や、受験参考書を含む学習参考書、辞書などを通して、広く日本人学習者が体験することとなった。

しかし、これら日本人学習者本位の学習法や、その背後にある「文法・訳読式教授法」が、英語が使えない日本人を育成してきた元凶であるとの根強い批判があったし、現在もある。たしかに、明治以降の英語教育において、難解な熟語や構文に注目が集まり、英文を分析して正確に訳せないと先に進めないといった悪しき習慣を招いた側面もあった。しかし、多くの日本人が英語を使えないのは、これらの学習法や「文法・訳読式教授法」の責任ではない。そもそも、英語のシャワーが確保できないEFL環境では、それを補うために「英文法」を明示的に教えることは不可欠であるし、それを日本人向けに分かりやすく纏

めた「学校文法」や、それを理解させるための各種学習法や「文法・訳読式教授法」は貴重な存在であったし、現在もそうである。問題は、日本の学校教育における英語教育が、本来、英語を使うためのものではない、特に話すためのものではない「学校文法」や「文法・訳読式教授法」のみをその中心に据えてきたことにある。「学校文法」を運用するプロセスが軽視されてきたのである。

これらのことに関し江利川⁽²⁾は、むしろ学習者本位の学習法に多大な価値を認め、中でも受験英語に焦点を当てて、受験参考書こそが日本人にふさわしい英語学習法の宝庫だと指摘している。受験英語によって日本人は読み書きを中心に相対的に高い英語力を保持してきたし、その基礎があったからこそ、日本人は海外の先進文化を大量に翻訳・摂取することが可能となり、近代化を担うことができたとする。

さらには、1990年代から経済のグローバル化が進み、経済界から英会話中心の「実践的コミュニケーション能力」の育成が求められたことに関し、文部省が学校の英語教育を会話中心に転換し、文法や英文解釈に重きを置かなくなったこと、特に、2009(平成21)年の高等学校学習指導要領では「授業は英語で行うことを基本とする」と宣言し、カリキュラムから英文法についてリーディングやライティングまでもが消えたことを問題視する。そして日本では、行き過ぎた会話中心主義の下で、「英語がわからない」生徒の割合が増え、英語学力の低下と格差が生じたと指摘する研究者も多いとしている。

行き過ぎた会話中心主義の所産が「英語がわからない」生徒の割合を高めているとの指摘は、日々の英語授業で実感はしているものの、その証明が本稿の目的ではないのでこれ以上の言及は避けるが、江利川が先の指摘部分の前半で言及しているように、日本の先達が苦勞して作り上げてきた日本人学習者本位の学習法や「文法・訳読式教授法」は日本がEFL環境であるが故に必要なとされざるを得ないし、それゆえカリキュラムがたとえ会話重視に移行しても消滅することは決してないであろう。

日本人学習者本位の学習法が効果を特に発揮

したのは、英語にはある文法・語彙範疇や発想が日本語にはない、あるいは双方が1対1の完全対応をしない場合であった。しかし、たとえ効果を発揮したとはいえ、それらは日本人学習者が理解しにくい、あるいは誤りやすい項目であることには違いない。これらには特に、現在完了、過去完了、未来完了などの「時制」、「相」や、直説法、仮定法といった「法」の概念が含まれよう。中でも、日本語には完全対応をする文法範疇がない「法」の概念、特に「仮定法」には多くの日本人学習者が苦しめられてきた。

その理由にはいくつか考えられるが、仮定法が日本語に完全対応する文法範疇でないという理由以外には、仮定法の英語史上の複雑な変化が文法学者に多様な記述的立場を生み出したためだと考えられる。すなわち、古代英語ではif節はthat節や様々な副詞節と共にSubjunctive(接続法)として用いられていたが、中世英語ではSubjunctiveの用法が直説法や法助動詞で表現され、近代・現代英語では古代英語から存在する「仮定法現在」、中世英語から生じた助動詞を用いる「仮定法未来」、さらには「仮定法過去」との「時」を区別するために中世英語後期に生じた「仮定法過去完了」の4つの用法となったため、この複雑な変化を背負う現代英語の仮定法の記述が、言語形式、意味、時制の点で複雑さを生み出し、そのことが学習者の理解を妨げてきた。

そこで本稿では、日本人学習者の「仮定法」理解を教育現場で促進するために、「仮定法」を「学校文法」の立場から整理し、指導のポイントを考察する。次に、「仮定法」を用いる数多くの構文の中から、as if以下が仮定法である構文を取り上げ、指導のポイントを考察する。As if構文には3章で見るように、「仮定法」を指導する上で、日本人学習者が理解しにくい項目が他の構文よりも数多く内包されているからである。なお、その際、日本人学習者の中でも、「仮定法」を学習するのが初めてである高校生に焦点を当て、彼らに仮定法のどの項目をどのように説明し、理解させるのが最も望ましい指導法となるのか、共時的立場から「学校文法」に依拠しながら考察する。

2. 仮定法とその指導

仮定法は、平成21年3月告示の高等学校学習指導要領に基づく、『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』の中に教えるべき項目として明記されているが、その具体的内容については明記されていない。しかし、同学習指導要領解説の「第3章 英語に関する各科目に共通する内容等」の中の「文法事項」の「(キ) 仮定法」に、「仮定法については、高等学校において初めて学習させるものであり、各科目に応じたふさわしいものを指導する (下線は筆者) とあることから、仮定法の具体的内容はもちろんのこと、その1つであるas if 構文も高等学校での指導対象になり得る文法事項であるし、それぞれの具体的内容のうち何を取り上げるのかも教科書や指導者に委ねられていることになる。

そこで、高校で初めて仮定法に接する生徒には、まず、法の概念と命令法、次に、直説法と仮定法の区別を理解させることから入るのはどうだろうか。

2-1. 法と命令法

動詞の語形変化で叙述の際の心的態度を表す文法範疇は「法 (mood)」と呼ばれている。このmoodは気分や心持ちを意味するmoodとは別語で、mode(様式)と同じ語源であるが、この法という文法範疇は現代英語にも明確に残存する叙述の方法である。宮内⁽³⁾によれば、インド・ヨーロッパ祖語には大体において、直説法 (Indicative)、仮定法 (Subjunctive)、願望 (仮定) 法 (Optative)、戒告法 (Injunctive)、命令法 (Imperative) という5種類の叙述法があったとしているが、この法という文法範疇は、その言語形式、意味、時制の各時代における変化、混交、消失、新たな発生などの複雑な変遷を経て、古代英語、中世英語、近代・現代英語にも伝えられてきた。

現代英語には、直説法、仮定法、命令法という3つの法が残っている。法は叙述の方法なので、いずれも述べる際の話し手の気持ちや態度といった判断を示している。このうち命令法については、Curme⁽⁴⁾によれば、eat, sit など意志を表す単純命令形は、O! や ouch! といった間投詞

同様、屈折 (inflection) が発生する時代以前からあった最も古い形態の口語であるとしているが、現代英語においても、命令・要求・依頼・希望・禁止などの意志や意欲といった非現実を現実化する最も強い法として残っている。しかし命令法に対応する文法範疇は日本語にもあるし、言語形式の指導も、「動詞の原形を文頭に置き、否定形は Don't+ 原形を、特に相手を強調する場合には主語の You+ 原形を文頭に置く」との指導で済むことから、高校生には理解しやすい法である。事実、中学校でも「命令文」として扱われているので、ここではこれ以上の言及はしない。

指導のポイント:そこで初めて接する高校生には、次の2点を簡潔に指導することから入ればよいであろう。

- (i) 英語には法という、ある事柄に対してどのような気持ちや態度で表すかといった述べ方があり、命令法、直説法、仮定法の3つがある。
- (ii) 命令法は中学校で学習した命令文のことで、話し手が聞き手に何かをしてもらいたい、あるいは、してもらいたくないという気持ちや態度を表す述べ方。作り方は、「動詞の原形を文頭に置き、否定形は Don't+ 原形を、特に相手を強調する場合には主語の You+ 原形を文頭に置く」。

2-2. 直説法と仮定法の区別

仮定法を指導する上で、高校生が最初に理解の困難を感じる点は、直説法現在形と仮定法現在形の違い、さらには直説法過去形と仮定法過去形の違いなど、それぞれの名称、形態、時制、意味の類似性と齟齬、要するに、直説法と仮定法の区別である。

2-2-1. 直説法

直説法は、その英語である indicative が「じかに indicate する (指し示す)」の意味であることから、叙実法 (Fact-mood) とも呼ばれ、あらゆる文のうち最も多い。学校文法では、話者がある事柄を事実として述べる方法をいうとされている。従って、必ずしも事実を述べるのではなく、事実として述べるという話者の心的態度が問題で、客観的な真偽は問題ではない、ということ

が意味をもつ。また、直説法の動詞の形を仮定法、命令法との違いでいうと、be 動詞が人称、数、時制によって am, are, is; was, were と変化し、have は三人称単数現在の場合 has となり、その他の動詞は三人称単数現在の場合 -[e]s が付くということだけで他は同じということだが、これらの内容はすべて中学校での既習事項である。中学校では、命令文と、勧告・助言を表す should および丁寧な依頼・勧誘を表す would を除けば、扱われるのは直説法のみである。

指導のポイント:従って、初めて法や直説法という概念に接する高校生に対しては以下の2点が重要となる。

- (i) ある事柄を、それが客観的に事実であろうとなかろうと、事実だという気持ちや態度で述べる方法を直説法という。I like coffee. という言い方は、実際にコーヒーが好きであってもなくても、「私はコーヒーが好きだ」という事柄をそのまま淡々と述べるという自分の気持ちや態度を表しており、ある事柄を直接的に表すという意味で直説法と呼ぶ。
- (ii) 中学校や高校でこれまで学習してきた英語はすべて事柄を直接的に述べた言い方なので直説法の英語である。そこで、これまで学習してきた現在形、過去形、未来形、現在完了形、過去完了形などと呼ばれていたものは、本来はそれぞれ、直説法現在形、直説法過去形、直説法未来形、直説法現在完了形、直説法過去完了形と呼ばれるべきものである。

2-2-2. 仮定法

これに対して仮定法 (Subjunctive) は、高校生が初めて接する法だけに指導に注意を要する。現代では仮定法と呼ばれるこの Subjunctive は、subjoin「付加する」と同じ語源の語で (元来ラテン語の modus subjunctives=mood to be subjoined⁽⁵⁾)、この法が「従属節 (Subordinate Clause) の中の動詞の法である」との意味から付与された名称である。「1. はじめに」においても軽く言及したように、古代英語では if 節や that 節や様々な副詞節といった従属節に Subjunctive (接続法) が用いられていたが、従属節が主節

に接続・従属するという意味では「接続法」「附属法」が本来的な訳語である。

訳語はさておき、仮定法ほどその歴史的変移ゆえに、様々な分析的立場と名称が与えられてきた文法範疇もないだろう。大塚⁽⁶⁾によれば、古代英語には明確な仮定法の屈折語尾があったが、現代英語に至って消失したため、今日では、三人称単数現在に-sをつけず、動詞beは人称のいかんにかかわらずbe、過去一人称・三人称単数にwereを用いる以外には直説法と形態上の区別はなく、形態重視の立場の人は当然これらを法より時制の用法と考え、Sweetは時制法(Tense-Mood)とし、Jespersenは想像時制(Imaginative Tense)と呼ぶ。他方、歴史的・意味的観点を入れ、他の言語との比較をとり入れれば、仮定法は当然認められることになり、この立場にはSonnenschein、Onions、Curmeなどがいるとする。

ここでは仮定法の定義をCurme⁽⁷⁾に求めてみると、「仮定法には多くの異なる機能があるが、より高次元で纏めると、動作・状態を現実としてというよりは、話者の想念として述べる方法」(訳は著者)ということができる。仮定法が叙想法(Thought-mood)と呼ばれる所以である。

この「話者の想念」に関わる具体的内容を文法書や学習参考書に求めてみると、「假定」、「願望」、「祈願」、「懇願」、「要求」、「提案」、「感情」、「判断」、「必要」、「遺憾」、「驚き」、「総意」、「決定」、「欲望」、「主張」、「動機」、「命令」、「推奨」、「勧誘」、「疑念」、「疑惑」、「可能性」、「蓋然性」、「不確実性」、「想像」、「想定」、「予想」、「比喻」、「意志」、「意欲」、「義務」、「期待」、「希望」、「推量」、「条件」、「許可」、「強制」、「誓言」、「忠告」、「譲歩」、「目的」と、非現実である想念は実に多岐に亘る。

これらを表す仮定法の言語形式であるが、英語の6つの時制に沿って分類してみると(英文例を便宜上、条件を表す従属節の形で示す)、仮定法現在(If he be, etc.)、仮定法現在完了(If he have been, etc.)、仮定法過去(If he were, etc.)、仮定法過去完了(If he had been, etc.)、仮定法未来(If he should be, etc.)、仮定法未来完了(If he should have been, etc.)の6種類となる。

学習参考書の中には、仮定法は、上記の例として示した英文のように、If節に導かれ条件を表す従属節(この場合副詞節)内の動詞形がその典型であるとするものもある。従って、それだけが仮定法だと誤認している高校生もいるであろう。しかし、仮定法の用法は実に多様であり、この形で用いられる以外にも多くの用法がある。例えば、同じ従属節内で用いられても、I wish I were rich.(金持ちであれば!)のように、I wishの目的語となる名詞節内で用いられる場合もあれば、It is time you went to bed.(もう寝る時間ですよ)のように、従属形容詞節内で用いられる場合もある。また、Oh were I there!(ああ、そこにいれば!)のように独立の文や、[If I thought about it]という従属節の省略されたI should think so.(まあそう思います)のように、本来の主節が独立の文として用いられる場合もある。さらには、as if it were soからできたと言われるas it were(いわば)や、had better...(...したほうがよい)、had (or would) rather...[than](...よりは)むしろ...したほうがよい)のように慣用的語法として用いられる場合もあれば、条件を表すif節の意味が単語や句や他の節に含まれる場合もある。品詞レベルでいうと、名詞、前置詞、不定詞、副詞(句)、接続詞、分詞、形容詞(節)などに含められる場合である。例えば、A Japanese would never say such a thing.(日本人ならそんなことは言わないだろう)[名詞]、Without water, we could not live.(水がなければ、我々は生存できない)[前置詞]、To hear him speak English, one would take him for an American.(彼が英語を話すのを聞いたら、人はアメリカ人と思うでしょう)[不定詞]、I would not do so in your place.(私があなたの立場ならそうはしないだろう)[副詞句]、He cannot be in his right mind, otherwise he would not do such a wild thing.(彼は正気なはずがない。もし正気ならそんな無茶な事はしないだろう)[接続詞]、Left to herself, she would begin to cry.(ほっておけば、彼女は泣き始めるだろう)[分詞]、Any one who would do that would be laughed at.(それを行おうとするなら誰しも笑われるだろう)[形容詞

節]などの場合である。

以上のことを踏まえ、先の6つの分類に沿った仮定法の用法とそれらに関わる用法を、井上⁽⁸⁾と宮内⁽⁹⁾に依拠して整理し、それぞれの指導のポイントを考察していこう。

2-2-2-1. 仮定法現在

現在または未来の事柄の仮定・疑惑・願望・想像などを表し、動詞は人称や数に関係なく常に原形を用いる。つまり、「三人称・単数・現在」でも-sはつけず、be動詞は常にbeを用いる。仮定法現在はやや古風な表現で、現代英語ではあまり用いられず、直説法現在や「should + 原形」や「may + 原形」で代用される場合が多い。

(1) If節の中で用いて現在または未来についての仮定・想像を表す。

If it *be* fine tomorrow, I will go. (明日天気がよければ行きます)

指導のポイント:「If節の動詞に原形を用いる」と指導するが、この用法は古風で、現代英語では上記の例を、If it *is* fine tomorrow, I will go. と直説法現在形で表すので、英作文などでは避けるように指導すべきであろう。

(2) 主節に願望・要求・提案・主張・命令などを表す動詞がくるときに、次に続く名詞節の中で用いる。

I desire (or demand, suggest, advise, request, propose, insist, order などの動詞) that action *be postponed*. (行動が延期されることが望ましい[を要求する、提案する、忠告する、要請する、提起する、主張する、命令する])

We suggested that she *go* to the hospital. (彼女が病院に行くように我々は提案した)

指導のポイント:願望・要求・提案・主張・命令などの対象となる内容は現実の事柄ではなく、非現実の想念なので仮定法になると理解させる。2つ目の例文のように、主節の動詞が過去形であっても、名詞節中の動詞(すなわち、「病院に行くこと」)は想念上のことであり、別世界のことである。従って、これには時制の一致の原則が適用されず、仮定法現在形のままであることも理解させる。この用法は、現代ではアメリカ

英語に見られるが、もともとはイギリス英語にあった用法が17世紀にアメリカに移入され今日に及んでいる。イギリス英語ではその後、that節中に「should + 動詞の原形」を用いる用法が正用法になったが、アメリカ英語の影響で今日では再び仮定法現在が使われ始めている。しかし、仮定法現在形と直説法現在形のちがいが理解できない生徒がいる場合には、「この用法では、should + 動詞の原形を用いる」と指導しておけば、I desire that action *should be postponed*. となって、I desire that action *is postponed*. とする過ちは防ぐことができよう。なお、このことを簡潔に記すために、多くの学習参考書では、「should」は省略できるとして、「(should) + 動詞の原形」としている。

(3) 感情・判断・必要・遺憾・驚きなどを表す名詞・形容詞がit is ... that節構文の補語になるときに、次に続くthat節の中で用いる。

It is a pity (or our decision, proposal, consensus, request などの名詞) that he *go* there alone. (彼がそこに一人で行くのはかわいそうだ[のが我々の決定だ、提案だ、総意だ、要求だ])

It was necessary (or important, desirable, proper, essential などの形容詞) that some immediate effort *be made*. (すぐ何かの努力が必要だった[重要だった、望ましかった、適当だった、大事だった])

指導のポイント:基本的には上記の(2)と同じで、感情・判断・必要・遺憾・驚きなどの対象となる内容は現実の事柄ではなく、非現実の想念なので仮定法になると理解させる。また、主節の動詞が過去形であっても、that節中の動詞には時制の一致の原則が適用されないことと、イギリス英語のように、that節中に「(should) + 動詞の原形」を持ちいれば、It is a pity that he (*should*) go there alone. となって、It is a pity that he *goes* there alone. とする過ちを防ぐことができることにも触れたい。

(4) 独立文の中で用いて、願望・祈願・勧誘・のろいなどを表す。

God *bless* you! (あなたの上に神様の恵みあらんことを)

The plague *take* you!(疫病に取りつかれてしまえ)

指導のポイント:これらの表現は古い文章か、文学的表現や慣用的表現に残る若干の成句に限られ、普通は「May+主語+原形」の形式を用いるので、God *bless* you!=*May* God *bless* you!, The plague *take* you!=*May* the plague *take* you! となることも指導する必要がある。さらには、May ... !を用いた独立祈願文も文語調で古文体になりつつあり、口語体ではhopeやwishを用いるのが自然で、hopeだとそのあとにはmayまたは直説法を用い、wishにはmayまたは仮定法のwould、should、mightを用いることも指導しておきたい。従って、上記の例文はそれぞれ、I *hope* God *may* bless you. や I *hope* God *will* bless you, I *wish* the plague *may* take you. や I *wish* the plague *would* take you. などとなる。

(5) 従属節の文頭に出して用い、譲歩の意味を表す。Come what may, I will go to see him.(どうなろうと、彼に会いに行く)

Go where you will, I will follow you.(君がどこへ行こうと、君について行く)

指導のポイント:「動詞の原形を節の文頭に出せば譲歩の意味を表す」と説明するが、譲歩を表す用法は多様なので、上記以外にも、Be it ever so humble, there's no place like home.(どんなにみすばらしくても、わが家ほどよいところはない)や Try as you may, the stone won't move.(どんなに一生懸命やっても、その石は動かないよ)などの例も提示しておきたい。また、譲歩の意味が直説法でも表せることを理解させるために、上記の例にそれぞれ、Come what may(=Whatever may come)、Go where you will(=Wherever you may go)、Be it ever so humble(=However humble it may be)、Try as you may(=However hard you may try) というように、「疑問詞+ever」の形式も併記しておくのがよいだろう。

(6) lestに導かれる節の中で用い、「... しないように」の意味を表す。

Give him food *lest* he *perish*.(彼が死なぬよう食物を与えよ)

指導のポイント:「lest+ 仮定法」は古い用法で、今

日ではshouldを伴うのが普通である。しかしこのlest ... shouldも文語で現代英語ではかなり重苦しく日常文としてはほとんど使用しない。それにも関わらず、日本の学生が多用するのは日本の英語教育界が未だに古い用法を教えているからであり、今後変えていく必要がある。ただし、lest ... shouldには2つの意味があり、「～しないように」の意味の場合には、例えば *lest I should* fail より *so that I may not fail* や *so as not to fail* の方が口語体でよいと指導すべきであるが、「～しまいかと」の意味の場合には、例えば「学校に遅れはしまいかと心配した」だと、I was afraid *lest I should* be late for school. を正訳とすべきであろう。⁽¹⁰⁾

2-2-2-2. 仮定法現在完了

ある動作が完了したことについて、疑念や不確実性が伴う場合、これを仮定的条件として述べようとするときに「have+ 過去分詞」の形で用いる。

If he *have failed* this time, he will be sure to succeed next time.(今度だめだったとしても、次にはきっと成功する)

指導のポイント:今日の英語では、このような場合に直説法現在完了を用い、仮定法現在完了を用いることはまれである。疑念の強い場合は、後述するように、shouldを伴った仮定法未来完了を用いるので、仮定法現在完了は仮定法の指導対象から除外してよいだろう。

2-2-2-3. 仮定法過去

動詞や助動詞の過去形を用い[ただしbe動詞はwereを用いる。しかし現代の口語ではwasも使用される]、現在の事実と反する仮定・想像または実現不可能な願望を表す。

(1) 現在の事実と反する仮定を表すIf節と、その帰結となり現在の事実と反する想像を表す主節の中で用いる。また、Ifは省略できる。その場合は倒置が生じ、動詞が主語の前にくる。

If I *were* rich, I *would* do so.(私がもし金持ちであつたら、そうするのだが)

If I *had* wings, I *could* fly to you.(もしも翼があ

れば、君の所へ飛んでいけるのだが)

Had I wings, I could fly to you. (もしも翼があれば、君の所へ飛んでいけるのだが)

指導のポイント:これは仮定法過去の代表的用法ともいえるべきもので、「If+主語+動詞の過去形、主語+would(could, might, should)+動詞の原形」の形式で表すことと、形は過去だが、意味は現在であることに注意させる。「事実とは異なる仮定と想像であることを示すために、動詞・助動詞は過去形を使っている」と記した学習参考書もあるが、歴史的事実を別とすれば、高校生に印象付ける上では効果のある説明かも知れない。

また、上記の例文は、意味の上ではそれぞれ、*As I am not rich, I will not do so. As I have no wings, I cannot fly to you.* と直説法現在形で表現できることにも気付かせたい。勿論、これらの意味と仮定法過去形での意味とは完全に等価ではないが、高校生に仮定法と直説法の差異性と共通性を理解させる上で多少教条的になるのも、教育文法として認められてもよいのではないだろうか。

If節の省略と主語と動詞の倒置は、高校生にはやや難解だが、倒置は仮定法以外にも見られる項目なので取り上げてよいだろう。なお、文語であることに注意させること。

(2) *I wish* や *Would [that]* の目的語となる名詞節の中で用い、現在の実現不可能な願望を表す。
I wish I were a bird. (もし私が鳥ならなあ)
Would that you could come! (おいでになれたらよいものを)

指導のポイント:上記の例は、現在の実現不可能な願望を表す仮定法過去の2つの代表例である。*I wish* は口語調で、*Would [that]* は文語調である。これらの例文は意味の上ではそれぞれ、*I am sorry I am not a bird. I am sorry you cannot come.* と直説法で表現できることにも気付かせたい。同じ願望を表す場合でも、達せられそうな望みの場合には仮定法をとらない *hope* を用い、*I hope he will come.* [たぶん来てくれそうな場合] と表現するが、実現の可能性が低い場合は *wish* を用い、*I wish he would come.* [たぶん来そうもない場合] と表現する、と比較的に提示

すれば理解が進むであろう。他にも、*Would [to] God [that] や [I] would [to] God*、さらには *O that* や *If only* などもあるが、これらの例文提示はしておきたい。

(3) 主節が省略された、本来If節である独立文の中で用い、実現不可能と思われる現在の願望を表す。

O had I wings! (ああ、我に翼ありせば!)

指導のポイント:倒置文であることと、通例、仮定法過去の前に間投詞がくることに注意させる。この構文は文語であり、If節の働きをして [*If I had wings, ...*] や、(1)の3つ目の例文のように、*if* が省略されたものと等価であると説明すれば理解が容易になるだろう。

(4) If節が省かれた、本来主節である独立文の中で用い、婉曲または丁寧・謙遜などを表す。

I should like to see him. (彼に会いたいものです)
Would you kindly show me the way? (道を教えていただけないでしょうか)

指導のポイント:これらにはそれぞれ、[*if I might be allowed to, if possible*], [*if I were to ask you*] を補うことと指導すれば、理解が容易になるだろう。しかし、それよりもむしろ、*should like to* で「～したい」という丁寧な慣用的表現として、また、*would*+原形で丁寧な依頼・勧誘を表す、と指導する方が運用に役立つであろう。

(5) *It is [high] time* に続く従属形容詞節の中で用い、当然予期される事が現在も実現されていないことを表す。

It is time she were married. (彼女はもう結婚している年ごろだ)

指導のポイント:まだ結婚していないのに、「結婚している」と表現するのは現在の事実と反するので仮定法過去形になると指導する。また、*It was time you were up.* (もう起きてよい時刻でした)のように、主節の動詞が過去形になっても従属節に時制の一致の原則は適用されないことはこれまでと同じである。さらに、上記の例文は、*It is time for her to be married.* のように不定詞を用いて表せることにも触れたい。ただし、不定詞を用いる直説法の表現よりも仮定

法を用いる表現のほうが穏やかな表現になるが、高校生にはそこまで触れなくてもよいであろう。

(6) 慣用的表現として用いる。

as it were [=so to speak で、as if it were の if の省略] (いわば)、had better ... (... したほうがよい)、had best ... (... がいちばんよい)、had (or would) rather ... [than] (... よりは) むしろ ... したほうがよい)、had (or would) as soon ... as (... より ... したほうがよい)、were it not for ... [=if it were not for ...; but for ... =if there were not ...] (... がなければ)

指導のポイント:元来は現在の事実と反する仮定・願望を表す仮定法過去の用法であったものが、名残りをとどめている例である。説明はできるだけ省いて慣用的表現として理解させるのがよい。

(7) If 節の代用形として用い、現在の事実と反する仮定を表す。

With (=If I *had*) your assistance, I *could* succeed. (あなたのお助けがあったら、私は成功できるのですが)

指導のポイント:「if を使わずに仮定法過去を表すことがある」と導入されることが多いが、2-2-2.において言及した、「条件を表す if 節の意味が単語や句や他の節に含まれる場合」のことである。そこでは品詞レベルで例文を挙げたが、ここでは高校生が理解しやすいように別の枠組みで例文を挙げるのもよいだろう。

(a) 主語に仮定の意味がある場合

A stupid man would do the same thing again. [=If he *were* a stupid man, he *would* do the same thing again.] (愚かな男なら同じことを再度行うだろう)

(b) 副詞(句)に仮定の意味がある場合

But for (or *Without*) enough budget, the project *could* not succeed. [=If it *were* not for enough budget, the project *could* not succeed.] (十分な予算がなければそのプロジェクトは上手くいかないだろう)

(c) to 不定詞に仮定の意味がある場合

He *would* be delighted to learn of your success. [=He *would* be delighted if he *learned* of

your success.](君の成功を知れば彼は喜ぶだろう)

(d) 分詞構文に仮定の意味がある場合

The same thing, *happening* [=if it *should* happen] in Japan, *would* be disastrous. (同じ事が日本で起これば不幸であろうに)

分詞構文に直説法で条件を表す用法があるので、高校生には一見分かりやすく見えるが、仮定法の意味であることを理解させるために、*would* に注目させる。

(e) 関係詞節に仮定の意味がある場合

Any newspaper which *did* not state the facts *would* not sell well. [=If any newspaper *did* not state the facts, it *would* not sell well] (事実を書かない新聞はいずれも売れることはないであろう)

(f) 言外に仮定の意味がある場合

Could you get another chance? [=If you *lost* this chance, *could* you get another chance?](この機会を失ったら別の機会があるだろうか)

言外から仮定の意味を理解するのは、高校生には高度な作業なので、例文提示の際には、文脈から推測できるように他の英文も添えて提示するか、1文であっても推測しやすい例文を提示することが求められよう。

(g) if 以外の接続詞に仮定の意味がある場合

What *would* you do *in case* you *were* attacked by someone? (もし誰かに襲われたらどうしますか)

Suppose (or *Supposing*) a ghost *appeared* now, what *could* you say to it? (もし今幽霊が現れたら何と言ってやりますか)

(8) 過去の事実と反対の仮定を表す場合に用いる。

Were I not completely aware of my duty to my family and my country, I *would* not have come back tonight. (もし私が一家と国家に対する義務を十分に自覚してなかったなら、私は今晚ここへ帰ってこなかったでしょう)

指導のポイント:この例文は宮内⁽¹¹⁾が、米国映画 *Roman Holiday* の中から Ann 姫の言葉を引用したものであるが、姫の自覚に関わる事柄

は過去のことなので、本来なら次項で扱う仮定法過去完了となり、文頭は *Were I not* ではなく *Had I not been* となるべきところである。ところが宮内によれば、姫が帰還の決心をしたこと、それを実行したこと、例文の言葉を言うまでには僅か数時間しかたっていない、すなわち姫の心中ではこの言葉を言う瞬間は「今」の中に含まれる時間間隔なのである。つまり仮定法で扱われる時間は客観的(社会的)時間であるが、話者の心中には話者なりの主観的時間というものがあり、この場合、客観的(社会的)時間においては過去であるものが、姫の主観的時間では現在に含まれるのである。確かに、教養あるとされる英語母語話者と話しているときに、本来仮定法過去完了が使用されるべき場合に仮定法過去が使用されることを時折経験する。仮定法の言語形式の時間と話者の主観的時間は必ずしも一致せず、両者間には「揺れ」あるいは「ずれ」が生じることがある。

しかし、話者や著者のこの微妙な心理を読み取るのはかなり高度なことであり、大学で文学作品を読む場合には必要であっても、高校生に仮定法を指導する際には混同を招く恐れがあることから、除外すべき対象であろう。

(9) *as if* 節の中で用い、現在の事実と反する仮定・願望を表す。

He looks as if he *were* ill.(彼はあたかも病気のように見える)

He looked as if he *were* ill.(彼はあたかも病気のように見えた)

指導のポイント:「あたかも(まるで; ちょうど) ... かのよう」と解釈するが、これについては3章で詳細に論じるので、ここではこれ以上の論及はしない。

2-2-2-4. 仮定法過去完了

動詞の過去完了形や助動詞の過去形+(toなし)の完了不定詞を用い、過去や現在完了の事実と反する仮定・想像または実現不可能な願望を表す。用法は仮定法過去とほぼ同じであるが、「時」の基準が現在ではなく、過去を基準にしている点が異なる。

(1) 過去の事実と反する仮定を表す *If* 節と、その帰結となり過去の事実と反する想像を表す主節の中で用いる。また、*If* は省略できる。その場合は倒置が生じ、*Had* が主語の前にくる。

If I had made a little more effort, I *should have succeeded*.(もし私がもう少し努力していたら成功していただろう)

If he had known your address, he *would have written* to you.(彼が君の住所を知っていたら君に手紙を書いたであろうが)

Had he known your address, he *would have written* to you.(彼が君の住所を知っていたら君に手紙を書いたであろうが)

指導のポイント:これは仮定法過去完了の代表的用法ともいうべきもので、「*If*+主語+*had*+動詞の過去分詞形、主語+*would*(*could*, *might*, *should*)+*have*+動詞の過去分詞形」の形式で表すことと、形は過去完了だが、意味は過去であることに注意させる。

また、上記の例文は、意味の上ではそれぞれ、*As I did not make* a little more effort, I *did not* succeed. *As he did not know* your address, he *did not* (*could not*) write to you. と直説法過去形で表現できることにも気付かせたい。勿論、これらの意味と仮定法過去完了形での意味とは完全に等価ではないが、高校生に仮定法と直説法の差異性と共通性を理解させる上で多少教条的になるのも、教育文法として認められてもよいのではないだろうか。

If 節の省略と主語と *had* の倒置は、仮定法過去の場合と同様、高校生にはやや難解だが、倒置は仮定法以外にも見られる項目なので取り上げてもよいだろう。なお、文語であることに注意させること。

(2) 現在完了の事実と反する仮定を表す *If* 節と、その帰結となり現在完了の事実と反する想像を表す主節の中で用いる。

If he had been asleep till now, he *should not have been* aware of that.(もし彼が今までずっと眠っているのなら、彼はそのことに気付いてはいないはずなのだが)

指導のポイント:仮定法過去完了は「過去の事実

に反する假定・想像を表す」ということだけが高校生に印象付けられている傾向がある。しかし、英語の世界では現在完了の時制で表現すべき事象も多々あるので、「現在完了の事実に対する假定・想像を表す」ことも忘れず取り上げるようにしたい。

(3) 現在の事実に対する假定を強調するIf節と、その帰結となり現在の事実に対する想像を強調する主節の中で用いる。

If I *had had* the money [at the present moment], I *should have paid* you [now].(金がありさえしたら、今すぐにもお返しするのですが)

指導のポイント: 假定法過去完了が「現在の事実に対することを強調するために用いられることがある」ことも指導すべき事項であろう。なお、Jespersen⁽¹²⁾は上記の例文は、If I *had* the money, I *should* pay. よりも否定の要素が強いとしている。例文提示の際には、内容が過去に関することでないことを明確にするために、時が現在であることが副詞(句)や文脈から明確に理解できる英文を提示する必要がある。

(4) I wishやWould [that]の目的語となる名詞節の中で用い、過去において実現しなかった願望を表す。

I wish I *had learned* English.(英語を習っておけばよかったのに)

Would that I *had been* a bird then!(もし私が鳥だったらよかったものを)

指導のポイント: 上記の例は、過去において実現しなかった願望を表す假定法過去完了の2つの代表例である。I wishは口語調で、Would [that]が文語調であることは假定法過去の場合と同じである。これらの例文は意味の上ではそれぞれ、I am sorry I did not learn English. I am sorry I was not a bird then.と直説法で表現できることにも気付かせたい。他にも、假定法過去の場合と同様、Would [to] God [that]や[I] would [to] God、さらにはO thatやIf onlyなどもあるが、これらの例文提示もしておきたい。

(5) 主節が省略された、本来If節である独立文の中で用い、過去において実現されなかった願望を表す。

O *had* he not *died*!(ああ、彼が死ななかったらよかったのに)

指導のポイント: 倒置文であることと、通例、假定法過去完了の前に間投詞がくることに注意させる。この構文は文語であり、If節の働きをして[If he *had* not *died*, ...]や、(1)の3つ目の例文のように、ifが省略されたものと等価であると説明すれば理解が容易になるだろう。

(6) If節が省略された、本来主節である独立文の中で用い、過去において実現されなかった願望を表す。

A pin *might have been* heard to drop.(ピン1本落ちてでも聞こえたであろうに)

I *could have come* yesterday.(きのうなら来れたのに)

指導のポイント: これらにはそれぞれ、[if a pin *had dropped*.], [if I *had wanted* to come.]を補うことと指導すれば、理解が容易になるだろう。しかし、意味を読み取れるようになるには、文脈から読み取り可能なかなりの数の例文に接することが必要なので、多少時間をとっても、それぞれの例文で省略されているif節の内容を口頭で言わせたり、書かせたりするプロセスは確保したいものである。

(7) 慣用的表現として用い、過去において実現されなかった假定を表す。

had it not been for ...[if it had not been for ...; but for ...; if there had not been ...](...がなかったならば)

指導のポイント: 慣用的表現として用いられる假定法は、元来、假定法過去の用法であったものの名残なので、假定法過去完了の慣用的用法はほとんどない。これについては、假定法過去で取り上げたwere it not for ...との関連で、上記の例を取り上げるだけでよいだろう。なお、上記の例も、were it not for ...も、Ifが省略されたために倒置が生じていること、およびIf節の代用形として用いられるBut for ...は、假定法過去と假定法過去完了の両方に用いられるために、いずれの意味であるかは、主節の動詞の形から判断せざるを得ないことにも注目させたい。

(8) If節の代用として用い、過去において実現さ

れなかった仮定を表す。

With (= If I had had) your assistance, I could have succeeded.(あなたのお助けがあったなら、私は成功できたのですが)

指導のポイント: 仮定法過去の場合と同様、「条件を表すif節の意味が単語や句や他の節に含まれる場合」のことである。仮定法過去か仮定法過去完了かは、主節の動詞の形で判断することに注意させる。以下、仮定法過去の場合に提示した枠組みで例文を挙げておく。

(a) 主語に仮定の意味がある場合

A stupid man would have done the same thing again.[=If he had been a stupid man, he would have done the same thing again.](愚かな男だったら同じことを再度行っただろう)

(b) 副詞(句)に仮定の意味がある場合

But for (or Without) enough budget, the project could not have succeeded.[=If it had not been for enough budget, the project could not have succeeded.](十分な予算がなかったならばそのプロジェクトは上手くいかなかっただろう)

(c) to不定詞に仮定の意味がある場合

He would have been delighted to learn of your success.[=He would have been delighted if he had learned of your success.](君の成功を知っていれば彼は喜んだであろうに)

(d) 分詞構文に仮定の意味がある場合

The same thing, happening [=if it should have happened] in Japan, would have been disastrous.(同じ事が日本で起こっていれば不幸であつたろうに)

分詞構文に直説法で条件を表す用法があるので、仮定法過去の場合と同様、高校生には一見分かりやすく見えるが、仮定法過去完了の意味であることを理解させるために、*would have been* に注目させる。

(e) 関係詞節に仮定の意味がある場合

Any newspaper which had not stated the facts would not have sold well. [=If any newspaper had not stated the facts, it would not have sold well.](事実を書かなかった新聞はいずれも売れることはなかったであろう)

(f) 言外に仮定の意味がある場合

Could you have got another chance? [=If you had lost this chance, could you have got another chance?](この機会を失っていたら別の機会があつただろうか)

仮定法過去の場合と同様、言外から仮定の意味を理解するのは、高校生には高度な作業なので、例文提示の際には、文脈から推測できるように他の英文も添えて提示するか、1文であっても推測しやすい例文を提示することが求められよう。

(g) if以外の接続詞に仮定の意味がある場合

What would you have done in case you had been attacked by someone?(もし誰かに襲われていたらどうしていましたか)

Suppose (or Supposing) a ghost had appeared then, what could you have said to it?(もしそのとき幽霊が現れていたなら何と言ってやりましたか)

(9) 文脈によっては、主節で仮定法過去が用いられても、従属節で仮定法過去完了が用いられる場合がある。

If he had stayed in this town then, he might be alive.(もしあの時この町に滞在していれば、彼は今も生きているかも知れないのに)

指導のポイント: 主節と従属節の時制がずれる場合のことである。文脈によっては、過去の動作や状態の結果が、現在の状態を導き出すことは往々に見られる。上の例文を、*If he had stayed in this town then, he might not have died.*のように、仮定法過去完了の一般的な形で表現させる練習をするのも仮定法の時を理解させる一助となるであろう。

(10) 文脈によっては、従属節で仮定法過去が用いられても、主節で仮定法過去完了が用いられる場合がある。

If he were in this town, I should have met him before.(もし彼がこの町にいれば、今までに彼に会ったであろう)

指導のポイント: これも主節と従属節の時制がずれる場合のことである。ここで重要なのは、*If he were in this town*は過去をも含めた広い意

味での現在の事実と反する仮定を表しているということである。現在の状態を表す動詞は過去から現在までの状態の継続を含意するからである。

(11) as if節の中で用い、過去や現在完了の事実と反する仮定・願望を表す。

He looks as if he *had been* ill.(彼はあたかも病気だったように見える)

He looked as if he *had been* ill.(彼はあたかも病気だったように見えた)

指導のポイント:「あたかも(まるで; ちょうど) ... だったかのよう」と解釈するが、これについては3章で詳細に論じるので、ここではこれ以上の論及はしない。

2-2-2-5. 仮定法未来

If節に *should* か *were to* を用いて、未来についてのぼんやりした予想またはありそうもないことを表す。

If I *should* fail, I will (or *would*) try again.(万一失敗しても、またやってみます)

If he *were to* hear of your failure, he *would* be surprised.(仮に彼があなたの失敗を聞くようなことがあれば、驚くでしょう)

指導のポイント: *should* も *were to* も語形は過去形なので、仮定法過去に分類している学習参考書もある。しかし、*should* は義務・宿命の意味を持つ *shall* の過去形であり未来の意味を持つ。また *were to* も、*were* が仮定法過去であっても、*be* 動詞 + *to* と同様、*to* と結合することによって宿命を表現することから未来の意味を持つ。よって本稿では、意味に重点を置いて仮定法未来とする。

文法書では、*should* は「未来の強い疑念を表し、*were to* は「未来の純然たる仮定を表す」としていることから、学校文法や学習参考書では、「万が一の *should*」とか「あり得ない事を条件とする *were to*」のように両者を区別し、If it *should* rain, I will (*would*) not go out.(万一雨が降れば、私は出かけない) や If the sun *were to* rise in the west, I *would* not change my mind.(太陽が西から上がるようなことがあっても、私は

考えを変えない) といった例文をよく挙げている。しかし、「未来の強い疑念」と「未来の純然たる仮定」は明確に分けることができるだろうか。これに関し井上⁽¹³⁾は、Hornby が *Patterns and Usage*, § 119 d で、If he *should* (*were to*) hear of your marriage, he *would* be surprised.(彼が万一君の結婚のことを聞いたら驚くだろう) という例文を挙げていることや、細江逸記が『動詞叙法の研究』で現代の普通の口語では *should* の代わりに *were to* を用いようとする傾向が見られるとしていることを紹介している。すなわち両者の差は明確に分けがたいと見てよいし、実際上は互いに代わり用いられているようである。このことから初心者である高校生には、*should* = *were to* と教えてよいのではないだろうか。また、口語では主語が1・3人称の場合、*were to* の代わりに *was to* が用いられることもあるが、直説法の「*be* 動詞 + *to*」の過去形と混同する恐れがあることから、これには触れない方がよいだろう。

ただし、上の例文のうち if 節に *should* を用いれば、主節では *will* でも *would* でもよいが、if 節に *were to* を用いれば主節には *would* などの仮定法過去の助動詞を用いなければならないことは指導すべきである。

その指導法としては次のようなことが考えられる。まず If 節に *should* を用いることに関しては、次のような例文を提示する。a) If it *rains*, I *will* not go out. b) If it *should* rain, I *will* (*would*) not go out. c) If it *rained*, I *would* not go out. 次に If 節に注目させ、「これらの相違は「雨が降ること」に関して、話者が実現の可能性をどの程度認めているかの違いであり、a) が最も実現の可能性が多く、b) がこれに続き、c) が最も可能性が少ない。a) と c) との間には相当な差があるから、その差が主節の *will* not go out と *would* not go out に表れている。b) は a) と c) の中間にあるので、主節は a) に従ってもよく、c) に従ってもよい」と説明する。また If 節に *were to* を用いることに関しては、「元来この形は「*be* 動詞 + *to*」の仮定法過去形なので主節では *would* などの仮定法過去の助動詞を用いなければならない」と説明するのはどうであろうか。

2-2-2-6. 仮定法未来完了

現在または未来のあるときに完了している事に関する想定または「万が一」の気持ちを表す。「have 動詞+過去分詞」や「should +have+ 過去分詞」の形をとる。ただし、仮定法未来完了を扱った文法書はまれである。

(1) 現在完了の想定を表す

He must have arrived by this time. If he *has arrived*, he will be sure to call on me.(彼は今ごろもう到着しているに違いない。到着していれば、きっと私に会いに来ます)

指導のポイント:語形を見ればわかるように、直説法現在完了の語形と同じである。また、想定の意味は仮定を表すIfから読み取れるので、指導の対象外としてよい。

(2) 未来完了の想定を表す

I think I will have left when you come back. If I *have left* by that time, I will not be able to see you.(君が戻って来るころには、僕はもう出発してしまっていると思うが、出発してしまえば、君にはお目にかかれないことになる)

指導のポイント:「時や条件を表す副詞節では未来完了は現在完了で表す」という、学校文法や学習参考書でよく取り扱われる直説法現在完了と、これも語形が同じになる。想定の意味は仮定を表すIfから読み取れるので、指導の対象外としてよい。

(3) 現在の完了に対する万一の想定

I think he has not arrived yet. But if he *should have arrived*, he will be sure to come to see me.(まだ到着していないと思うが、万が一到着していたら、きっと私に会いに来る)

指導のポイント:仮定法未来で使用される「万一のshould」が現在完了形と共に用いられる場合である。shouldが未来の意味をもつことから、仮定法未来完了と呼ばれるが、ここでは文法上の呼称に触れず、「should+have+過去分詞」は「...すべきであったのに」や「...したはずだ」の意味の他に、if節で「万が一(すでに) ... していたら」の意味を持つこともある、と理解させる方が運用的である。

(4) 未来の完了に対する万一の想定

If I *should have arrived* before you return, I will be sure to come to see you.(あなたが戻る前に万が一到着していたら、きっと会いに参ります)

指導のポイント:この場合も、「should+have+過去分詞」は(3)の場合の他に、if節で「万が一(未来に) ... してしまっていたら」の意味を持つこともある、と理解させる方が運用的である。

以上のことから、教室では仮定法未来完了はその文法用語も含め、用法も指導の対象外とし、「if節における「should+have+過去分詞」の意味・用法」として指導するのが適切と考えられる。

3. As if構文とその指導

3-1. as if構文で取り上げられている内容

直説法と仮定法の違いすら充分に理解できていない高校生が多いのが現実であろうに、仮定法を理解できていることが前提となるas if構文を高校生に理解させ、それを運用できるようにするにはどうすればよいのだろうか。このことに対応するためにまず、学校文法でよく取り上げられるas if構文に関わる内容を見てみよう。

高校では「英文法」が廃止されて久しく、その教科書がないので、高校生用の学習参考書を調べてみると⁽¹⁴⁾、よく取り上げられているas if構文に関わる内容は:

- ① as if以下の節には仮定法過去か仮定法過去完了を用いる
- ② as if以下の節に直説法現在を用いることがある
- ③ as if以下の節が仮定法過去のbe動詞の場合はwereを用いるが、wasを用いる場合もある
- ④ as ifの代わりにas thoughを用いてもよい
- ⑤ It is as ifの形で用いられることがある
- ⑥ as ifの代わりにlike as ifが用いられることがある
- ⑦ as ifの代わりにasが用いられることがある
- ⑧ as ifの代わりにlike asが用いられることがある
- ⑨ asas if、と相関的に用いられることがあるように集約できよう。

さらに、詳細化された指導内容には:

⑩ as if 以下の節が短縮され、形容詞、分詞、前置詞句、to 不定詞を用いることもあるがある。

これらの内容は、最初に科学文法を確立したと言われる Sweet 以降の英文法家の文法書で扱われている項目をほぼ網羅している。もっとも、これは学校文法で扱われる項目が、科学文法に依拠しながら体系化されてきたので当然と言えば当然である。しかし、中には現代英語を学習する高校生に教えるのが適切かどうか検討すべき項目もあると思われる。

そこで、これらの項目をどのように捉え、どのように取捨選択し、それらを高校生にどのように理解させればよいのかということが次の課題となる。そこで本章では、これらの項目の文法上の問題点と、高校で扱うことの当否、および高校生に理解をさせる上での指導のポイントを順次考察していく。

3-1-1. as if 以下の節には仮定法過去か仮定法過去完了を用いる

「あたかも(まるで; ちょうど) ... かのよう」に訳される as if 構文の as if の後続には、その内容が叙想上のことなので仮定法が用いられる。この構文は、例えば He looks as if he *were* ill. (彼はあたかも病気のような顔つきをしている) という文なら、He looks as if [he *would* look] if he *were* ill. (彼は実際は病気ではないが、仮に病気だったらこうかと思われるような顔つきをしている) の [he *would* look] が省略されてきたものである。しかし高校生にとっては、この構文で問題となるのは、どのような場合に as if 以下が仮定法過去あるいは仮定法過去完了になるのか、ということであろう。仮定法には時制の一致の原則は適用されないということを高校生は学習しているので、主節の動詞の時制と従属節中の動詞の時制との関係性において一層理解に苦しむのである。

この点に関し、文法書にはその関係性を説明したものはなく、例えば井上⁽¹⁵⁾は、「as if という接続詞の次には仮定法の過去 (Past) または過去完了 (Past Perfect) が来ることになって

いるが、過去完了が来たときは思いがけない事 (unexpectedness) や驚き (surprise) など感情に色どられたいわゆる感情的主観性 (emotional subjectivity) を表すことが多い。..... as if を含む文において特に注意すべきは主節の動詞の時制と従属節中の動詞の時制との関係がすこぶる自由であって、そこに一定の法則が存在しないかのように見えることである。..... このような現象の起こる理由の一つは 古式英語においては Past Perfect Tense なるものはなく、Past Tense をもってその用をなさしめたことが現代英語まで遺存したからであり、また一つの理由は元来比較なるものは種々状況の異なるものの間においてでも成り立つので、これを時間的に考えても今と昔とをささ比較しうるので、したがって as if (as though) の前後の動詞の時制も、その場合の思想様式が異なるにつれて変わった形式をとるのである。けっして普通の条件文句の場合のように単純な考えによって見るべきものではない」としている。

また宮田⁽¹⁶⁾は、現在や過去の状態を表す場合には as if のつぎに過去形を用いるとして、He speaks *as if he were* angry. と He spoke *as if he were* angry. の例を挙げ、過去に関連した仮定だからといって、*as if he had been* angry というように、過去完了にはしないとしている。ただし、これは be や have とか know のような本来状態を表す動詞の場合に限られるとして、He spoke *as if he had* no money at all. と He spoke *as if he knew* everything. の例を挙げているが、他方、do, finish, write のような動作を表す動詞の場合には、as if で始まる節では過去完了を用いるとして、He spoke *as if he had finished* his work. などの例を挙げている。

いずれの場合も、as if 節の内容や動詞の性質によって仮定法過去か仮定法過去完了が決定されるとして、主節の動詞の時制と従属節中の動詞の時制との関係性には触れていない。また、挙げられている個々の言説や例文はその通りなのだが、それらを敷衍すると反証も可能である。なるほど、仮定法過去完了が過去の非現実の事柄を叙想するのであるから、例えば、あり得な

い非現実を述べる He speaks as if he *had seen* a ghost. のように、感情的主観性を表す場合が多くなるのは理解できるが、逆に、He speaks as if he *had written* the novel when young. や He spoke as if he *had written* the novel when young. のように、あり得る非現実を述べる場合もある。さらに、現在や過去の状態を表す場合には as if の節に過去形を用いるとしているが、上の例に関して挙げるなら、Today he speaks as if he *had been* angry at that time. (彼ったら、今日はまるであの時に怒っていたかのような口振りだ) も Today he spoke as if he *had not been* angry the day before. (彼ったら、今日はまるで昨日怒っていなかったような口振りだった) も可能である。また、He speaks as if he *walked* around his house every day. (彼はまるで家のあたりを毎日散歩するかの言う) のように、動作を表す動詞の場合でも過去形は可能である。

このように個々の記述はできても、主節の動詞の時制と従属節中の動詞の時制との統一的な関係性が記述できていないのなら、次のような例を提示するのはどうであろうか。

He looks as if he were ill now. (彼はまるで今病んでいるように見える)

見える=現在 病気=現在

He looked as if he were ill then. (彼はまるでその時病んでいるように見えた)

見える=過去 病気=過去

He looks as if he had been ill. (彼はまるで以前病んでいたように見える)

見える=現在 病気=過去

He looks as if he had been ill since then. (彼はまるでその時以来病んでいるように見える)

見える=現在 病気=現在完了

He looked as if he had been ill the day before. (彼はまるで前日に病んでいたように見えた)

見える=過去 病気=大過去

He looked as if he had been ill since then. (彼はまるでその時以来病んでいるように見えた)

見える=過去 病気=過去完了

以上の例文を観察してみると次の関係性がわ

かる。すなわち、「主節の動詞の示す時が現在であれ過去であれ、as if 節では、主節の動詞の示す時と同時の事柄を表す場合には仮定法過去を用い、主節の動詞の示す時よりも以前の事柄、または主節の動詞の示す時までの完了・経験・継続を表す場合には仮定法過去完了を用いる」ということである。本項に関して高校生に教える内容はこの関係性ではないだろうか。国内外の文法書は教えることを目的にしていなのでこの記載がなくても当然であろうが、教えることを目的にしている学習参考書には、筆者が調査した先の6冊のうち3冊には類似の言及があった。

3-1-2. as if 以下の節に直説法現在を用いることがある

指導のポイント: 小西⁽¹⁷⁾ は、口語では as if の次に直説法のくることが多いとして、It looks as if it's going to rain. と I feel as if this tree *knows* everything. という例を挙げている。Quirk, et al.⁽¹⁸⁾ は、as if に続く仮定法も直説法もほとんど差がないとしている。He treats me as if I'm a stranger. も He treats me as if I *were* a stranger. も unreality を暗示しており、共に 'I am not a stranger.' ということは推測できるからである。また、as if に続く直接法現在 は 事実的意味を表すとして、He looks as if he's sick: fetch the doctor. を挙げている。宮内⁽¹⁹⁾ は、as if に続く仮定法は可能性を基底とするが、直説法は確実性を基底とするとしている。さらに Curme⁽²⁰⁾ は、as if の次にくる直説法現在は一層の自信を示すとして、He acts as if he *is* [in love with her]. (彼は自分が彼女と恋をしているかのように振舞う) と It does look as if the very crisis *is* here. (まさに危機がここにきているかのようだ) という例を挙げている。すなわち、口語では as if という仮定を用いてもその仮定に対して確実性と自信がある場合、言い換えれば、その仮定に自分の思いや意見が一致する場合に直説法現在が用いられると理解できる。Curme の例で言うなら、話者は仮定の言語形式を用いながらも「彼が彼女と恋をしている」、「危機がここにきている」ということを事実だろうと判断して述べているの

である。また、It looks as if it *were* going to rain. では可能性が低く、「降らないかも知れないが」の気持ちが暗示されるのに対し、It looks as if it *is* going to rain. では「降る」ということを確実性と自信をもって述べているのである。それゆえ、上の例文のように、主節がIt looksやI feel、さらにはIt seemsで始まることが多いのも肯けよう。

従って、教室では高校生に負担や混乱を与えない配慮から、「口語では、仮定内容に事実性や確実性があると思われる場合には直説法現在が用いられることがある」と指導として、例文提示をする程度で止めておくのはどうであろうか。

3-1-3. as if以下の節が仮定法過去のbe動詞の場合にはwereを用いるが、wasを用いる場合もある

指導のポイント: 仮定法未来の項において、were toの代わりにwas toが用いられることがあるが、混同を避けるために触れないほうがよいとした。ここではwere toの代わりのwas to以外の場合について述べる。

Wereの代わりに、直説法過去のwasが用いられることは、Sweet⁽²¹⁾によれば、18世紀の口語体に著しい傾向があったとしているが、小西⁽²²⁾は、Melissa said, "It *isn't as if it was my first show.*"(初めての舞台じゃないんですもの)との例を挙げ、今日の口語ではit were より普通で強調的であるとしている。このようにwereの代わりにwasが用いられることは確立していると見てよい。従って、教室では「口語体では仮定法過去のwereの変わりにwasが用いられることがある」と指導する必要がある。

3-1-4. as ifの代わりにas thoughを用いてもよい

指導のポイント: しいて区別すればas ifは(不)可能性を強調し、as thoughは比較を含意するとか、as thoughは文語調という言説もあるが、意味も用法も区別なく用いられているのが現状である。そこで、as if構文の導入時にas if=as thoughと教えておくことが必要である。

3-1-5. It is as ifの形で用いられることがある

指導のポイント: この表現は特別の意味をもつ成句というものではなく、このItは漠然とした事情・状態を示す非人称の用法に過ぎず、「(事情・状況は)まるで...のようだ」の意味を表す。類例として、It seems as if ...やIt appears as if ...やIt looks as if ...「(事情・状況は)まるで...のように思える」があり、これらと同じ用法のItであるとの指導でよいであろう。

3-1-6. as ifの代わりにlike as ifが用いられることがある

指導のポイント: Curme⁽²³⁾は、通俗的な話し方ではas ifの代わりにlike as ifが多いに用いられるとして、Dickensの作品*Our Mutual Friend*から、'She holds him round the neck, *like as if* she was protecting him' という例を挙げている。しかし、高校生の初習者に通俗の用法まで教える必要はない。

3-1-7. as ifの代わりにasが用いられることがある

指導のポイント: Curme⁽²⁴⁾によれば、古い英語ではもともとifは用いられないのが一般的だったとし、Coleridgeの1800年の作品*Wallenstein*から、'He looks *as [if]* he had seen a ghost' という例を挙げている。2-2-2.においても言及したように、この古い用法が現代英語のas it wereに成句として残っている。この成句は教える必要があるが、現代英語を学習する高校生にこの項目は教える必要はない。

3-1-8. as ifの代わりにlike asが用いられることがある

指導のポイント: Curme⁽²⁵⁾によれば、古い英語ではas ifの代わりに時としてlike asが用いられたとして、Shakespeareの*Hamlet*, I, II, 217から、'Yet once methought It lifted up its head and did address Itself to motion, *like as* it would speak' という例を挙げている。現代英語の口語体や通俗的な話し方の傾向として、like asを単純化してlikeにして出来たのが、'It looks *like he was afraid*' で、これを話者がより大きな

自信をもって表現すれば、*like he's afraid* になるとしている。事実、現代アメリカ英語では主節に *look*, *seem*, *feel* などが用いられると、*like* 節に直説法現在が略式として用いられることが多い。このようなことから、*like as* は現代英語を学ぶ高校生には不必要であるが、*It looks like he was afraid.* の用法は口語体として使用されていることは教えてよい。また *It looks like he's afraid.* は、*as if* 節に関して 3-1-2. でも触れたように、「口語では、仮定内容に事実性や確実性があると思われる場合には *like* 節にも直説法現在が用いられることがある」と指導として、例文提示をする程度で止めておくのはどうであろうか。

3-1-9. *as ... as if*, と相関的に用いられることがある
She looks as noble as if she were a princess. (彼女はまるで王女のように高貴な顔立ちをしている)

指導のポイント: これは *as ... as* (～と同じ程度に ...) 構文の後の *as* が接続詞であり、*as if* 構文の *as* が同じ接続詞であることから相関的に用いられるようになったと考えられる。高校生には、*as ... as if* で「まるで～であるのと同じ程度に ...」の意味の成句として教えるのがよいだろう。

3-1-10. *as if* 以下の節が短縮され、形容詞、分詞、前置詞句、*to* 不定詞を用いることもある

She hurriedly left the room as if angry. (彼女はまるで怒ったかのように急いで部屋を出た)

She looked at her parents as if entreating forgiveness. (彼女はまるで許しを懇願するかのよう両親を見た)

He lay for several hours as if stunned. (彼はまるで気絶したかのように数時間横たわっていた)

She looked about as if in search of something. (彼女はまるで何かを探しているかのように見回した)

He suddenly stood up as if to leave. (彼はまるで立ち去ろうとするかのように突然立ち上がった)

The female scurried away in alarm as if for the male to follow. (その女性は、まるで男がついて

来るかのようにびっくりして逃げた)

指導のポイント: この事項への言及は、6種類の学習参考書のうち1つに、*to* 不定詞を置くことがあるとの記述があった。6種類の学習参考書に関する限り、形容詞、分詞、前置詞句を用いることがあることに言及しているのはなかった。しかし、接続詞以下が短縮される例は、*when angry*, *while walking* などのように、他の接続詞に関して学習しているので *as if* の場合も取り上げてよいのではないだろうか。その際の注意事項として、他の接続詞の場合と同様、*as if* 節の主語が主節の主語と同じであること、省略されるのは *as if* 節の主語 + *be* 動詞であることには触れなければならない。また、*as if* 節の動詞は *to* 不定詞に短縮されるが、その場合も *as if* 節の主語が主節の主語と同じであることを原則とすること、どうしても主語が異なる場合は、上の最後の例文のように *to* 不定詞の前に意味上の主語である *for* + 名詞を置くことにも触れなければならない。

4. おわりに

本稿では、日本人学習者、特に高校生に焦点を当て、「仮定法」の理解を促すために「学校文法」の立場から「仮定法」を整理し、教育現場での指導のポイントを考察した。また、「仮定法」を用いる数多くの構文の中から、*as if* 以下が仮定法である構文を取り上げ、指導のポイントを考察した。

一般に、仮定法は指導すべき文法項目の最終段階に位置付けられ、教える側にも指導し難いとの意識があり、定着の度合いも低い。しかし、ネイティブ・スピーカーには身近な存在で、本稿でも触れた *If* 節を伴わない、例えば “*I couldn't have done it without you.*” といった形が頻繁に行き交う。子供たちも日常的に用いる。EFL 環境にある日本人学習者には、英語史における仮定法の変遷、内包する意味合いなどの情報を必要に応じ与えるとともに、初級学習者が納得できる解説を明示的に加えることが必要である。近年注目されているフォーカス・オン・フォームのように、コミュニケーションに必要な場面で文

法の形式を認識し、機能との結びつきを理解するとともに、運用能力につながる指導が今後さらに必要になるものと思われる。

引用・参考文献

1. 文部科学省:高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編. 開隆堂出版, 東京, 2010, p.43
2. 江利川春雄:受験英語と日本人. 研究社, 東京, 2011, pp.iv-v
3. 宮内秀雄:法・助動詞. 研究社, 東京, 1955, p.45
4. Curme, G.O.: Syntax. Heath and Company, Boston, 1931, p.430,
5. 大塚高信:新英文法辞典. 三省堂, 東京, 1970, p.1006
6. 大塚高信:新英文法辞典. 三省堂, 東京, 1970, pp.1006-1007
7. Curme, G.O.: Syntax. Heath and Company, Boston, 1931, p.391
8. 井上義昌(編): 英文法辞典. 開拓社, 東京, 1966, pp.1150-1178
9. 宮内秀雄:法・助動詞. 研究社, 東京, 1955, pp.53-102
10. 井上義昌(編):英文法辞典. 開拓社, 東京, 1966, p.1177
11. 宮内秀雄:法・助動詞. 研究社, 東京, 1955, p.62
12. Jespersen, O.:A Modern English Grammar IV. Gerge Allen and Unwin, London, 1961, P.126
13. 井上義昌(編):英文法辞典. 開拓社, 東京, 1966, P.1152
14. 高梨健吉:新英語の構文150. 美誠社, 京都, 1994
鈴木寛次, 三木千絵:根本理解!やり直し英文法. 大修館書店, 東京, 2007
前川哲郎:基礎からの総合英語. 中央図書, 京都, 1977
釜池 進(監):Best Avenue. エスト出版, 京都, 2011
石黒昭博(監):総合英語Forest. 桐原書店, 東京, 2006
清水周裕:チャート式 基礎と研究 新英語. 数研出版, 東京, 1997
15. 井上義昌(編):英文法辞典. 開拓社, 東京, 1966, pp.1164-1165
16. 宮田幸一:教壇の英文法. 研究社, 東京, 1961, pp.35-37
17. 小西友七:実用高等英文法. 英宝社, 東京, 1966, p.112
18. Quirk, et al.: A Grammar of Contemporary English. Longman, London, 1972, p.755
19. 宮内秀雄:法・助動詞. 研究社, 東京, 1955, p.86
20. Curme, G.O.: Syntax. Heath and Company, Boston, 1931, p.282
21. Sweet, H.: New English Grammar Part II. Oxford University Press, London, 1898, p.108
22. 小西友七:時事英語文法. 語学書林, 大学社, 大阪, 1968, p.58
23. Curme, G.O.: Syntax. Heath and Company, Boston, 1931, p.282
24. Curme, G.O.: Syntax. Heath and Company, Boston, 1931, p.282
25. Curme, G.O.: Syntax. Heath and Company, Boston, 1931, pp.282-283